

スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは？
びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の「語り」から

豊田則成¹⁾ 金森雅夫¹⁾

What is the Meaning about the Experience of Sport Volunteering?
The Narrative of the Students in a Sport College Participating in the Intercollegiate
EKIDEN in BIWAKO 2005

Norishige TOYODA Masao KANAMORI

Abstract

The purpose of this study was to identify the meaning of student's experience of sport volunteer participation in the intercollegiate EKIDEN in BIWAKO 2005. According to the Research Question (RQ), "What is the meaning about the experience of sport volunteering", data was collected from 12 students in Sport College using semi-structured interviews and analyzed by classifying them into various categories. Through these steps, three hypothetical ideas based on the meaning of their experience of sport volunteering were revealed. The results suggest that students in a Sport College consider the meaning of their experience of sport volunteering as a psychological process, 1) the process from the passive behaviors toward sport volunteer, change of self, to change of attitude toward sport volunteer, 2) the active change from compulsory participation to a new challenge, and 3) the passive change from compulsory participation to passive understanding of self.

Key words : Sport Volunteer, Grounded Theory Approach, Interview, Qualitative Method, Informant.

1) 生涯スポーツ学科

はじめに

本研究は、スポーツ・ボランティアに参加することを通じて、個人がどのような内面の変化を体験しているのかについて質的に検討する。

そもそも、スポーツ・ボランティアとは「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり、また、国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門的能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支えたりする人」のことを指しており、Fig.1に示すように、①クラブ・団体ボランティア、②イベント・ボランティア、③アスリート・ボランティアに大別される（SSF笹川スポーツ財団，2004）。これらに関連する先行研究を概観すると、上記①を対象としたものは少なく（北村ほか，2005；後藤ほか，2006；山口ほか，2000）、③については皆無に等しい一方で、②の参加動機や満足感、継続意志などに焦点を当てた

研究が多い（長ヶ原，1991；川西ほか，2001：2002；前田・川西，1997；松本，1999：2003；佐藤ほか，1996）。ちなみに、本研究もまた②の範疇にあるといつてよい。しかしながら、先行研究が組織との関連や個人の社会的アイデンティティに着目してきている中であって、本研究のように、スポーツ・ボランティアを通じて経験される個人の体験の意味を質的に検討したものは他に類をみない。

ところで、本研究のように「個人の体験の意味」を問う場合、仮説検証型の研究方法では多くの限界が予測される（鈴木，2006）。先述したように、先行研究は様々な心理・社会的変数を用いた分析を試みている。ただ、それらは1つの側面に焦点を当てているに過ぎない。スポーツ・ボランティア体験を通じて、個人はどのような体験するのだろうか。このような命題を設定する場合、個人の体験を俯瞰するような分析の視点、すなわち、個人のスポーツ・ボランティア経験を統合的に検討することが求められる（ウヴェエ，2003）。

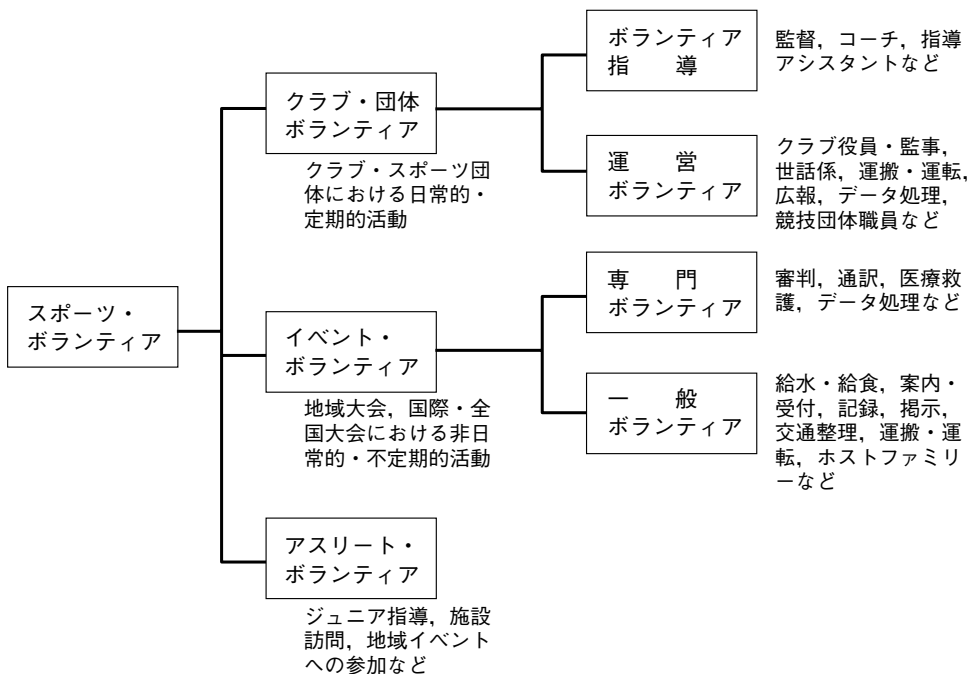


Fig.1：スポーツ・ボランティアの役割と範囲（笹川スポーツ財団（2004）を参照）

そこでは、外界の体験のみならず、個人の内界の変化を了解していく質的なアプローチが不可欠となる（鈴木，2006）。そして、その成果は、スポーツ・ボランティア経験の教育的意義を検討することに繋がると著者は考える。

このような背景から、本研究は、「スポーツ・ボランティアに参加することを通じて、どのような内面の変化を体験しているのか」というリサーチクエスション（Research Question：以下 R Q と称す）を設定し、質的にアプローチした。すなわち、インフォーマントである本学学生から得られたスポーツ・ボランティア体験の語りについてグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach；以下，G T A と略す；戈木，2005）を参考にして質的に分析し、カテゴリー化し、発展継承可能な仮説的知見を

導き出すことを目指した。

方 法

インフォーマント（Informant：以下，Inf. と称す）：「びわ湖大学駅伝」（第67回関西学生対校駅伝競走大会 兼西日本大学招待：2005年11月23日実施）にイベント・ボランティアとして参加した本学学生（計12名：第1段階3名，第2段階9名）を調査対象とした。調査対象となった本学学生の語りの印象を Tab.1 に示した。

調査期間：2005年11月下旬から12月初旬

調査形式：1対1形式の半構造化インタビューを実施した（50分程度）。インフォーマントに対して、インタビューの冒頭で本調査の趣旨を説明した後、会話の内容を I C レコーダーに収録することの承諾を得た。そして、インタビュー終了後、持ち帰った I C レコー

Table 1：Inf.の語りの印象

	Inf	性別	年齢	スポーツ経歴	語りの印象
第1段階	A	男	20	サッカー	話の始まりに「ええ～」や「ああ～」という言葉が多く、質問事項に対してやや困惑した様子が伺えた。
	B	女	20	バレーボール	質問項目についてやや困惑していたが、語り始めてから自分の考えがまとまってきたように感じられた。
	C	男	19	サッカー	問いかけに対して一旦よく考えてから返答する慎重さが伺えた。
第2段階	D	男	21	サッカー	問いかけに対しても意欲的に回答したいとする姿勢が伺われ、回答内容にも力強さが感じられた。
	E	男	21	陸上競技	少しビクビクしたような様子で、問いかけに対して「よくわからないんですけど」と前置きをすることが多い。
	F	男	21	サッカー	ボランティア活動への興味は強く、問いかけに対しても肯定的な回答が多かった。
	G	女	21	バレーボール	問いかけについて調査者に聞き返す場合が多く、慎重に回答しようとする姿勢が伺われた。
	H	女	18	陸上競技	「はい」や「いいえ」など、問いかけに対する単調な回答が多く、豊富な語りを導き出せていない。
	I	男	21	サッカー	一つひとつの言葉に思い入れを込めた口調で回答する印象を受けた。
	J	男	19	サッカー	力強く、ハキハキとした口調で、問いかけに対する回答もしっかりしている印象を受けた。
	K	女	21	陸上競技	多くのボランティア経験を有しており、今回のスポーツボランティアにも主体的に参加していた。
	L	男	20	硬式野球	ボランティアへの興味が薄く、今回の体験についてもあまり多くを語りたがらない印象を持った。

Table 2 : Inf. A, B, C の発言内容とコーディング

Inf	コード名 (No.)	発言の内容
A	消極的関与 (26)	えーっ…サッカー部はその駅伝のサポートを頼まれていたので、それで誰かがやらないといけないので…はい、やりました。
	積極性による爽快感 (58)	は…もう、やらされてるより、自分からやっているっていう気分のほうが、やっぱり…やっぱり、いやいややるよりかは、全然なんか気持ちいいものがありますね。
	目に見えないものの獲得 (78)	あーっ、そうですねー、今まではやっぱりボランティアというえーっと、その、何も買えない…買えないというか…無益な部分があったと思ってましたが、今回のボランティアでは、やっぱり、その、目に見えないものが入ったかと思います。
	積極性への気づき (80)	その…積極性であったり、その…何か、やる気っていうか、その…目に見えないものを感じ取れました。
	新しい自分への気づき (81)	やっぱりその、ボランティアで得たものがなく、その自分の知らない部分を見つけれなかったと思います。
	積極性への気づき② (82)	だからその、積極的っていうのは、なんやら、まあ具体的に言うと、目には…動けば目に見えるじゃないですか、でも本来は目に見えないから、その、活動したときに、その積極性が見られたりするじゃないですか、…何言ってんだ俺。
	新しい自分への気づき② (92)	その…積極性であったり、その…何か、やる気っていうか、その…目に見えないものを感じ取れました。
	新しい自分への気づき③ (116)	はい、自分の知らない面が見えました。
	積極的関与 (44)	えーっと、そうですね。あの…まあ、誰かがやらないといけないので、そこを自分が、自分なりに積極的にやっていたことが…ちょっと得たものかな。積極的にこう…取り組めました。今までと、その、誰かやるやろみたいな感じで、なんかあんまり…なかったんですけど、この、このときは、もう、誰かがやらないといけないので、そこを自分から積極的にいけたと思います。
	積極的関与② (60)	はい。ぐだぐだやるより、自分が積極的にやって、すすめていった方が、まあ…その、時間も短時間でその…作業も進むし…はい。そんなとこです。
	積極的関与③ (72)	えーっ、やっぱりさっきも言ったとおり、やっぱりいやいややるのではなく、その…自分から、やっていく姿勢が大事だと思います。積極的にやること…はい。
	積極的活動 (76)	ボランティア…えーっと、積極的にやる…積極的に活動する場だと思います。
	積極的関与④ (156)	やっぱり積極的にやることっすよね。
	積極的関与⑤ (158)	はい。誰かがやるまで待てたら、何も進まないで、やっぱり自分からどんどんやっていた方が…その、時間もかからないし…はい。そんなとこっすね。
	報酬による意味づけ (146)	あーっ、そうですね。それを買ったんで、ちょっとやろっかなと。
	積極的意味づけ (148)	ウェア買ってからやりましたね。でも別に、ウェアなくても、俺はやってましたよ。
	積極的意味づけ② (150)	その、時と場合によりますね。今回は別に、物がなくてもやってましたね。
	積極性の芽生え (98)	次はもっと、今回は駅伝やったんですけど、自分がやっているサッカーを…サッカーに関した、自分の興味があるボランティアに積極的に参加していきたいと、たまにはその、自分の知らない、関わったことのないボランティアも参加しようかなと。
	スポーツ以外の分野への挑戦 (102)	例えば、今まではスポーツ関係やったんですけど、それを何か…また違う分野に。
B	スポーツ以外の分野への挑戦② (106)	そうですね。地域…地域のボランティアに参加したいなと。
	強制的 (30)	強制って言うか…はい。
	消極的関与 (48)	楽しはなかったですけど、あの、強い選手とか、立命館とか京産とか強いんですけど、そういう選手の方とか見れて、すごいなあと思うながら。
	否定的 (72)	えー、そんな、やっぱり立ってるだけでだれも出でこないでそんなに、応援してやるだけなんで、別に…いなくてもって思うんですけど、いなくても出来る、大丈夫なんかなと思うんですけど、はい。
	苦労体験 (90)	いつも、テレビとかでマラソンとかしてやって、補助員してはる人の…なんていうか、しんどきではないですけど…補助員になって、やっぱり、応援も楽しく出来たんですけど、ちょっと、立つてばっかでしんどかったっていうか…
	葛藤 (74)	やっぱり…走ってる側からしたら、やっぱり出でこんかなととか、道はやっぱり、下見とかして覚えると思うんですけど、不安な部分もあるから…どうなんかなあ…はい…。
	有用欲求 (106)	色んなボランティアをして、その人のためにやってる訳ではないんですけど、いろんな人から「ありがとう」とか「助かったで！」とか言ってもらえるとやっぱり嬉しいんで、すごい役に立ちたいな思いがあります。はい。
	積極性による爽快感 (116)	自分から進んでやってくれる人が…自分から進んでやってくれる人…を求めてるって言うか、嫌々ではなく、自分からやりたいと思って、色んなボランティアをしてくれる人のほうがやっぱり、自分も気持ちいいと思うんで、はい。やり終わった後に、好きで出来たことなんで、何か色々得られると思います。はい。
	感謝の気持ち (90)	…そういう気持ちわかって、いつもやってくれやんらほんまにありがたいと思いました。
	感謝されたことによる爽快感 (94)	はい…普通に立っててやってくたことなんでですけど、先生が車から選手観察する車があるんですよ、そこから先生が「ありがとうな！」って言って、一人一人に言ってくれて、何か、強制でやらされてる訳ではないんですけど、やったことでもやっぱり、こっやってるだけでも先生言ってくれて、よかったなあって。
	感謝される嬉しさによる爽快感 (108)	はい、あの、学校からやらあかんって言われてたんですけど、最初はやっぱり20キロもあったんで、えらいなあーとか思いながらやってたんですけど、結構こみとか拾って、前にはこみがいっぱいあるけど、やってきた後ろ振返ってみると道はきれいになってて、やっぱりいいなあと思うながら、通りがりのおばちゃんとかも、「ありがとう」とか言ってくれやっで、はい。いいなあと思いました。
	必要性の発見 (78)	必要やと思いました。
	ボランティアへの意欲 (102)	はい。思います。強制じゃなくて、自分から進んで色んなボランティアをしてみたいと思います。
	部員としての責務 (18)	部としてみんなが参加しなくちゃならない感じだったんで…仕方なく参加した感じもありました。
	ボランティアとしての責務 (56)	はい。ほんとにおじいちゃんとおばあちゃんが、なんかびっくりして後ろに下がって、眺めてはったので、あのカメラマンにちょっと移動してもらって、おじいちゃんとおばあちゃんがみやすいようにしました。
	サポートへの関心の変化 (62)	そうですね、今まではサポートの立場で小・中・高と経験してきていないので大学にはいってきて、こういう風にちゃんとしたサポートの形で駅伝とかそういうのに参加したんは初めてなんでいろんな部分がわかりました。
	するスポーツ・みるスポーツ (22)	えー、いつも応援される立場のほうが多かったんで、補助員っていうかたちだったんですけど、そのやってる人と応援できてなんかちゃう立場から見えて楽しかったです。
	見えないところが見える (66)	そうですね。そのやる側とは全然違う、どうやったらやりやすくてきんらんだとか、その駅伝だったら選手がくるまで、選手がその場所にくるまでに周りのひとの準備とか、いろいろなところも見れたし、その走っている側やったら、とおるだけやけど、そこに走ってくる人がくるまでに、いたこととおじいちゃんおばあちゃんが集まってくる様子も見れたし、その通るまでのまわりの人の会話と聞こえたし、どんだけまわりの人が楽しみにしていて、瞬間をわかっているところもよくわかりました。
	過去のボランティア経験の想起 (24)	ボランティアは小学校の指導者とかは週に1回行ってました。
	子どもへの興味関心 (28)	えー、指導に興味を持っていたというより小学生とか小さい子どもが好きなんでその子たちと触れ合う場として始めたのがきっかけです。
	貴重な経験としての位置づけ (32)	えー、やっぱり、まあ他の大学とか行っていれば経験できないことなんで、経験しといたほうがいいかなと思いました。
C	ボランティア精神① (68)	やっぱりボランティアっていうのはその自分の強い意思、その大会をサポートしたいとか支えたいとかっていう、意思がなかったら人は来ないだろうし、やっぱりバイトと違う点っていうのはそのボランティアをしようとしている人の気持ちのものが違うと思います。だから、そのやっぱりバイトのバイトとして集まっている人と、比べれば、ボランティアとしては自分の意思を持って参加している人たちが集まっているということで、そちらの方が大会としても質が高くよりよい大会になると思います。
	ボランティア精神② (70)	そうですねその方がお互いにやりたくてやってるわけだし例えば駅伝だったら、走る側も走りたくてやってるし、ボランティアも、サポートする側も選手をサポートしようと思ってやってるわけだしそのお互いのモチベーションっていうのは同じだと思うし、その方が大会も進めやすいし、いいものになると思います。
	支援的立場の展望 (64)	えー、今はやっぱり体を動かすことのほうが好きなんでやる側の方がいいですけど、やっぱりおじいちゃんとかになったり、大人になっていくにしたがってその、若者のがんばる人達を応援する側にもなっても、ぜんぜんかまわないと思います。
	ボランティアを通してのスポーツ関与 (74)	やっぱり僕はサッカーしかやったことなかったんでスポーツというとかサッカーしかわからないんですけどやっぱり、他のスポーツ、テニス、バスケとか、そうゆうやったことのないスポーツのサポートとか裏側をやってみて、どんな風になっているのかっていうのをすごく興味があります。そして、もちろんサッカーの裏側ももっとしりたいと思います。
	スポーツの表裏 (40)	えーっやっぱりやってる側としては必死にやってる時っていうのは、応援してくれたりしてくれる人がどんな感じとかかわからないんですけど、その客観的にびわこマラソンを見て、応援する立場の方から見ると、いろんな人が反応してくださって、いろんな人が企画とかそういう補助員とかをしているから、駅伝もサッカーもそうですし、なりたっているんだなあと思いました。

やっぱり、その駅伝をするにしても走る人がメインなんでその走る人が不自由ないように…なるべく走りやすいように…のを考えて？やることを大切だということを感じました。

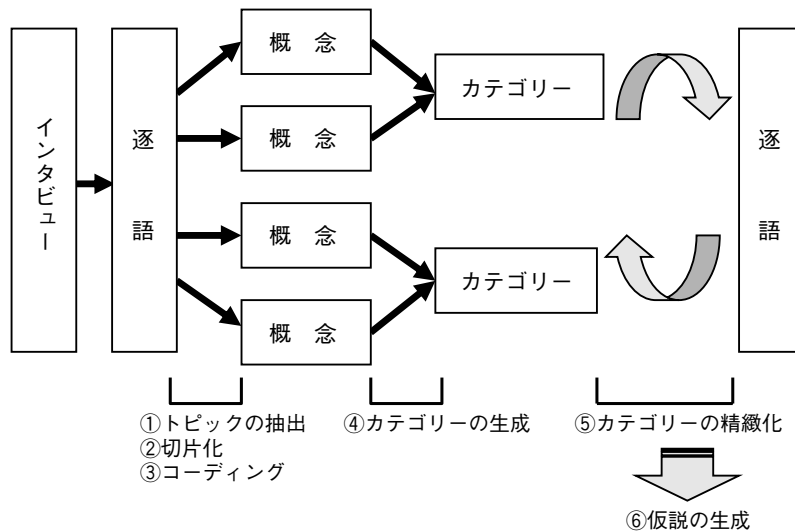


Fig.2：グラウンデッド・セオリー・アプローチの手続き

ダーの音声データをPC上で再生しつつ逐語を起こした。これらの手続きによって作成された逐語データをインタビュー資料と位置づける。そこでは、Inf.のプライバシー保護のため本研究の趣旨に反しない限り若干の加工を施した。

分析方法：質的研究法の代表的手法であるGTAを行った。すなわち、会話内容（逐語）を次のような手続きで分析した（Fig.2）。①トピックの抽出（テーマ関連のトピック）②切片化（注目すべき語りを抽出）③コーディング（コード名の配当）④カテゴリ生成（コードの抽象化）⑤カテゴリ精緻化（カテゴリの再検討）⑥仮説の生成（カテゴリ間の連関を確認）。注目すべきは、本研究においては上記の流れを2段階に渡って実施したことにある。そこでは、質的検討で常に問われる結果の妥当性や信頼性の確保に向けて理論的サンプリングを試みている。

結果及び考察

まず、Inf. A～Cの発言内容を切片化し、コーディングを行った（Tab.2）。次に、各コード（計47）から9つのカテゴリ〔強制的・否定的取組み〕〔積極的関与〕〔従事によ

る捉え方の変化〕〔自己への気づき〕〔感謝の気持ち〕〔必要性の認識〕〔積極的関与〕〔積極的思考〕〔新たな挑戦〕を生成した（以下、カテゴリを〔 〕、カテゴリグループを【 】で示す）。そして、それらを検討した結果、3つのカテゴリグループ【消極的態度】【自己変容】【積極的態度】を導き出し（Tab.3）、これをコアカテゴリとした時間軸を生成し（以下→で示す）、カテゴリ関連図を作成した（Fig.3）。そこでは、当初、〔強制的・否定的取組み〕により〔消極的態度〕を表したが、〔従事による捉え方の変化〕から〔自己への気づき〕に至り、それを契機に〔感謝の気持ち〕や〔必要性の認知〕が生じ、〔積極的関与〕をして、〔積極的思考〕を経て〔新たな挑戦〕に至る心理的プロセスが生成された。

次に、Inf. D～Lの発言内容に対して上記の手続きと同様の分析を行い、第1段階で生成したカテゴリやカテゴリグループ（コアカテゴリ）、カテゴリ関連図と比較・検討しながら精緻化を行った。ちなみに、このような2段階に渡って分析を行った背景には研究成果の精度を高めたいとする本研究者の意図がある。第1段階では、概して肯定的

な自己変容を伴った心理的プロセスを確認するに至ったが、それ以外にもスポーツ・ボランティア体験を通じて肯定的な自己変容を伴わない者がいることも充分想定された。すなわち、第1段階のみの分析では、スポーツ・

ボランティアに参加した学生の全体像を捉えられていないことが危惧された。このような背景から抽象化における理論的飽和 (theoretical saturation) を満たすことを目的として理論的サンプリング (theoretical sampling)

Table 3：生成されたカテゴリーとカテゴリーグループ（第1段階）

コード名 (No.)	Inf	カテゴリー	カテゴリーグループ
強制的 (30)	B	強制的・否定的取組み	消極的態度
否定的 (72)	B		
部員としての責務 (18)	C		
消極的関与 (26)	A	消極的関与	
消極的関与 (48)	B		
苦労体験 (90)	B	従事による 捉え方の変化	
ボランティアとしての責務 (56)	C		
葛藤 (74)	B		
サポートへの関心の変化 (62)	C	自己への気づき	自己変容
積極性による爽快感 (58)	A		
目に見えないものの獲得 (78)	A		
積極性への気付き (80)	A		
新しい自分への気付き (81)	A		
積極性への気付き② (82)	A		
新しい自分への気付き② (92)	A		
新しい自分への気付き③ (116)	A	感謝の気持ち	
有用欲求 (106)	B		
積極性による爽快感 (116)	B		
するスポーツ・みるスポーツ (22)	C		
見えないところが見える (66)	C	必要性の認識	
感謝の気持ち (90)	B		
感謝される嬉しさによる爽快感 (108)	B		
感謝されたことによる爽快感 (94)	B	積極的関与	
必要性の発見 (78)	B		
スポーツの表裏 (40)	C		
スポーツボランティアの心得 (60)	C	積極的思考	積極的態度
積極的関与 (44)	A		
積極的関与② (60)	A		
積極的活動 (76)	A		
積極的関与③ (72)	A		
積極的関与④ (156)	A		
積極的関与⑤ (158)	A		
過去のボランティア経験の想起 (24)	C	新たな挑戦	
子どもへの興味関心 (28)	C		
貴重な経験としての位置づけ (32)	C		
報酬による意味づけ (146)	A		
積極的意味づけ (148)	A		
積極的意味づけ② (150)	A		
ボランティア精神① (68)	C		
ボランティア精神② (70)	C	新たな挑戦	
積極性の芽生え (98)	A		
スポーツ以外の分野への挑戦 (102)	A		
スポーツ以外の分野への挑戦② (106)	A		
ボランティアへの意欲 (102)	B		
支援的立場の展望 (64)	C	新たな挑戦	
ボランティアを通してのスポーツ関与 (74)	C		

を行い、9名のInf.を追加し、分析対象とした。

Tab.4に、2段階の分析を経て導き出されたカテゴリ（計157）とカテゴリグループ（計14）を示す。まず注目すべきは、第1段階でコアカテゴリとした【消極的態度】→【自己変容】→【積極的態度】というプロセスが、第2段階で【消極的態度】→【自己変容】→【ボランティアに対する態度の変化】と修正されたことである。その内訳として、〔強制的・否定的取組み〕を〔強制的参加〕と〔消極的取組み〕に分割し、〔物的要求〕を新たに生成した。そして、〔従事による捉え方の変化〕を〔ボランティア従事〕と〔捉え方の肯定的変化〕に分割し、〔自己への気づき〕を〔肯定的変化の気づき〕と修正し、〔消極的自己理解〕を新たに生成した。また、〔受動的理解〕、〔ボランティア像の形成〕を新たに生成し、カテゴリ間の連関をFig.4に示した。

上記のようなカテゴリの精緻化を踏まえると、本件の研究事象となったスポーツ・ボランティア経験の特徴を読み取ることができる。すなわち、Inf.の全てが〔強制的参加〕

によるボランティア参加であり、その中には、積極的变化を体験した者もいれば消極的变化にとどまる者もいたということである。特に、積極的变化を体験した者には、スポーツ・ボランティアにおける内的な自己変容を経験し、その中で獲得した積極的姿勢を外界に凡化させていく内的変化を語っていた。彼らは、スポーツ・ボランティア活動を実際に経験することで、自己の肯定的変化に気づき、そこで獲得した積極性を自己の生活世界に有益に広めていったといえる。一方、消極的变化にとどまった者は、冒頭で触れた「報酬を目的としない」という、いわばスポーツ・ボランティアの定義に反する形（カテゴリとしては〔物的要求〕に相当）で、スポーツ・ボランティア活動へ関わりを求めたようである。その結果として、自己の〔受動的理解〕を語るにとどまり、スポーツ・ボランティア活動に期待することのできる自己の肯定的変化には至らなかったのかもしれない。このように、本研究はスポーツ・ボランティア経験を通じて体験される積極的变化と消極的变化を、実際に参加したInf.の「語り（narrative）」から明らかにした。

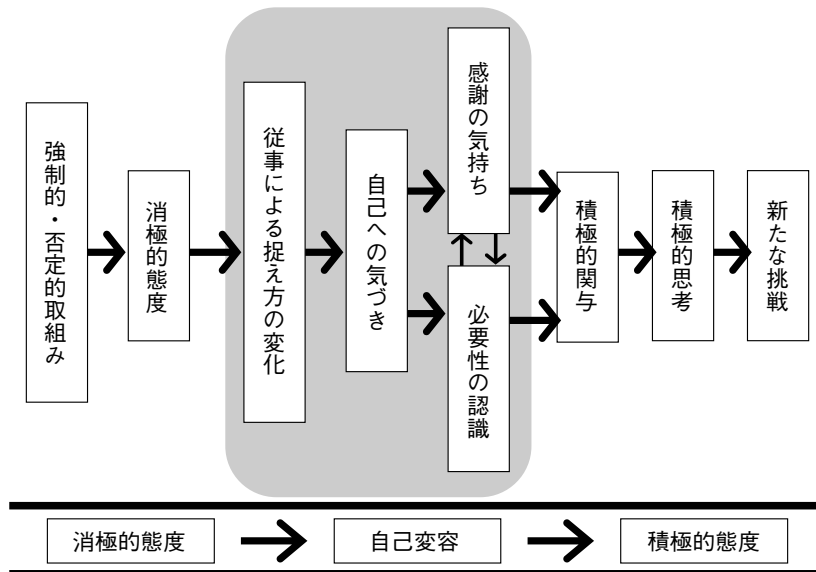


Fig.3：カテゴリ関連図（第1段階）

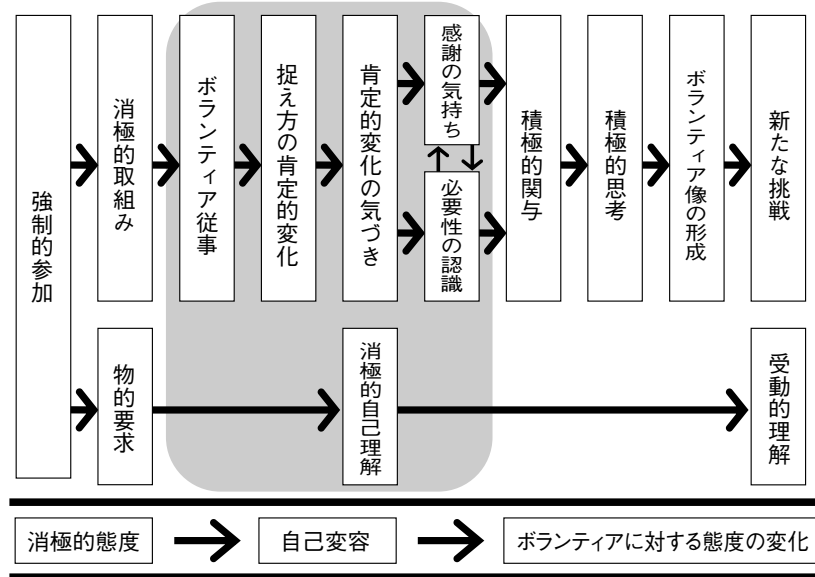


Fig.4：カテゴリー関連図（第2段階）

総 括

本研究は「スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは何か」といったRQの下、インタビューを実施し、GTAによる質的検討を行った。その結果、スポーツ・ボランティア体験を通じて、1)【消極的態度】→【自己変容】→【ボランティアに対する態度の変化】といった共通した心理的プロセスを辿り、2)「強制的参加」から「新たな挑戦」に至る積極的变化、3)「強制的参加」から「受動的理解」に至る消極的变化、を含んでいることを仮説的に導き出した。特に、積極的变化にみられる「ボランティア従事」から「新たな挑戦」に至るプロセスには、スポーツ・ボランティア活動に伴う積極的な【自己変容】のみならず、そこで獲得した積極性を自己の生活世界へと凡化したことを語っていた。そこでは、スポーツを「する」視点から「ささえる」視点への移動（山口，2004）が内的に経験されていたとも読み取ることができる。

これらのことから、スポーツ・ボランティアに参加した個人には価値観の拡大（the

expansion of values）を期待することができるといえよう。このような学習の形態を、個人が実体験から自己の意味づけを行い、自己の中から新たな価値観を新たに掘り起こしていくことから『発掘型体験学習』と称す。今後、この種の教育モデルの構築について検討していきたい。

文 献（Reference）

- 長ヶ原誠・山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫（1991）スポーツイベントのマネジメントに関する研究：ボランティアの継続意欲の視点から。鹿屋体育大学研究紀要，6：69-75.
- 後藤貴浩・森阪信樹（2006）総合型地域スポーツクラブの育成過程に関する研究：育成のための会議における会話データの分析。体育学研究，51：299-313.
- 川西正志・北村尚浩・萩裕美子・前田博子・柳敏晴・吉武裕・野川春夫・田畑泉・志村正子・坂元譲次・鈴木漠（2001）第13回スポーツ・レクレーション祭参加者・ボランティア調査報告書。鹿屋体育大学：鹿児島。
- 川西正志・北村尚浩・萩裕美子・吉武裕・前田博子・柳敏晴・野川春夫・田畑泉・志村正子・水上博司・長登健・早瀬健介（2002）第

- 14回スポーツ・レクレーション祭参加者・ボランティアに関する研究. 生涯スポーツ実践研究会年報：11-26.
- 北村尚浩・松本耕二・國本明德・仲野隆士（2005）スポーツ・ボランティアの組織コミットメント. 体育学研究, 50：37-57.
- 前田博子・川西正志（1997）スポーツ・ボランティアの情報チャンネルに関する研究：1995年世界選手権鯖江市について. 兵庫体育・スポーツ科学, 6：19-28.
- 松本耕二（1999）スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究：障害者スポーツイベントのボランティアに着目して. 山口県立大学社会福祉学部紀要, 5：11-19.
- 松本耕二・國本明德・北村尚浩・仲野隆士（2003）障害者スポーツイベントにおけるボランティアの参加動機：性別, 年代別, 活動経験別による比較. 山口体育学研究, 46：11-20.
- 戈木クレイグヒル滋子（2005）質的研究方法ゼミナール. 医学書院：東京都
- 佐藤豊・前田博子・川西正志・北村尚浩（1996）スポーツ・ボランティアの参加動機に関する研究：1995年世界体操選手権鯖江大会について. 日本体育学会第47回大会体育社会学専門分科会発表論文集：170-175.
- S S F 笹川スポーツ財団（2004）スポーツ・ボランティア・データブック. 笹川スポーツ財団：東京.
- 鈴木裕久（2006）臨床心理研究のための質的方法概説. 創風社：東京.
- ウヴェ・フリック（2003）質的研究入門. 春秋

社：東京.

- 山口泰雄・杉山重利・野川春夫・武隈晃・高橋伸次・大沼義彦・長ヶ原誠・Paul De Knop・Barry D. McPherson（2000）スポーツにおけるボランティア活動の組織化とマネジメントに関する国際比較研究. 平成11年度文部科学省科学研究費（一般研究：B2）研究成果報告書, 神戸大学：兵庫.
- 山口泰雄編（2004）スポーツ・ボランティアへの招待. 世界思想社：京都.

付 記

本研究の一部は、2005年度びわこ成蹊スポーツ大学共同研究費の補助を受け実施され、日本体育学会第57回大会（豊田則成（2006）スポーツ・ボランティアに参加することの意味とは？日本体育学会. 第57回大会予稿集. pp.121.）においてポスター発表された内容を含んでいる。

謝 辞

本研究において実施されたインタビューは、著者の指導下にあるゼミナール（豊田則成ゼミ）の地域スポーツ専門実習Ⅰ・Ⅱの一環として実施された。以下に、本研究のインタビュアーを列挙した。荒尾早紀, 石川友作, 伊藤啓太, 金井龍生, 川地理子, 酒徳真衣, 三反田裕也, 杉原由紀, 玉井公平, 中島太希, 中島理沙, 永吉愛（敬称略：順不同）。彼らの協力なくして、本研究は成し得なかったことは言うまでもない。ここに記して感謝の意を表したい。